女性教職員活躍事例集Ⅱ

～管理職への道のりと伝えたいメッセージ～

清里町立清里小学校　平野校長

Q お伝えしたいメッセージをお願いします！

女性だから、男性だからではなく、仕事のやりにくさを経験した者たちが管理職となってあらゆる場面で発信することで、働き方を徐々に変えることができています。「どうせ何も変わらない」「自分は、それどころじゃない」と思う前に、「自分だったら何ができるだろう」と、立ち止まって欲しいです。完璧じゃない自分だからこそ誰かのために頑張れること、役に立てることがたくさんあると私は思っています。

Q 管理職を志した理由やきっかけは？

周囲にいた女性管理職の先生や、お世話になった校長先生からお声をかけていただいたことが、管理職を目指すきっかけになりました。私には二人の娘がいますので、子どもが小さかった頃はお断りしましたが、当時の女性管理職の先生方は大変ご苦労されていたので、「夫婦共働きで子育てしながら管理職になることを自分が証明できれば、誰かの手助けになるのではないか」「やるからには、後に続く人のために道を切り開ければ」という思いがありました。

Q 管理職になるために必要だった支援は？

支援というか課題というか両方の話になりますが、管理職になる時に学校の公宅に住まなければならないということが、大きなネックでした。今はオホーツク管内も状況が改善されましたが、当時、夫も近隣校の教頭をしていましたので、両親、ご近所の方々の助けがあって、何とか乗り切ることができたと思っています。

居住地に関する支援はなかなか得られませんでしたが、そのような状況でも今までお世話になった教育長の皆さんには、少しでも女性の先生が働きやすいようにと人事等々いろいろと支援してくださいました。

次ページから
インタビューの全文を
掲載しております！
是非御覧ください！

Q 管理職になって気づいたことは？

まずは健康第一。お母さんがダウンすると、家庭全体がうまくいかなくなってしまいます。それと同じで、自分が（校長が）一番元気でないと学校運営を円滑に進めることが難しくなりますし、みんなを幸せにすることもできません。

もう一つは、教頭先生の働き方ですが、仕事ばかりに偏らないようにして、頑張って欲しいと思っています。一般の先生方と同様、家庭を第一に考える。そういう職場であるべきだと思っています。

Q 管理職のやりがいや魅力は？

私が一番嬉しい時は、自分の思いが全ての職員と共有でき、そして、その思いが子どもたちに響き出して、みんなの思いが一気に同じ方向に向いて、学校がガラッと変わる瞬間です。その「連鎖の瞬間」が大好きです。

Q 後輩教職員へのメッセージは？

人との繋がりを、大切にして欲しいと思います。

私はいろんな方々に助けられて今日に至っていますので、「人との関わりが自分の将来を救ってくれる」という気がしてなりません。「人との関わりは決して面倒なことではなく、ゆくゆくは全て自分に幸せを運んでくれる！力をいただくことができる！あなたの財産になる！」そのようなものではないかと思っています。

Q 管理職として子育てを始める職員に対し気をつけていることは？

私も子育てで大変だったことを踏まえ、「休んでも大丈夫だよ。人に迷惑をかけることではなくて、あたり前のことなのだから、みんなで助け合わなくてどうする！」という話を職員にして、安心して休める環境づくりをしています。

Q ご自身が子育てをしている時に支えとなった管理職のサポートは？

私がまだ一般教員だった頃、お昼頃から猛吹雪になった日がありました。集団下校の対応に追われバタバタしていた時に、校長先生が吹雪の中、二人の娘を保育所から学校に連れてきてくださいました。今でも忘れられない嬉しいサポートでした。

インタビュー全文【清里町立清里小学校　平野校長】

1・管理職を志した理由やきっかけを、お聞かせください。

周囲にいた女性管理職の先生や、お世話になった校長先生からお声をかけていただいたことが、管理職を目指すきっかけになりました。

私には二人の娘がいますが、子どもが小さかったので2年位はお断りし、上の子が中学校1年生、下の子が小学校5年生になった時に、お引き受けしました。

当時の女性管理職の先生方は大変ご苦労されていたので、「夫婦共働きで子育てしながら管理職になることを自分が証明できれば、誰かの手助けになるのではないか」「やるからには、後に続く人のために道を切り開ければ」という思いがありました。

その頃私は、中学校の音楽教師で吹奏楽部を担当し、教師、部活動、家庭を同時にこなす日々を過ごしていました。自分が好きでやっていることとは言え、毎日どのように過ごしていたのかあまり覚えていないぐらいハードな毎日でしたので、「何が変われば仕事と家庭の両立を、もう少しスムーズにできるのだろうか？」と、いつも考えていましたね。

2・管理職になるために必要だった支援は、どのようなことですか？

支援というか課題というか両方の話になりますが、管理職になる時に学校の公宅に住まなければならないということが、大きなネックでした。

今はオホーツク管内も状況が改善され、管理職も自宅からの通勤が認められる市町村がほとんどですが、その当時はまだ口約束程度でした。

最初に教頭として赴任した学校は、自宅から車で15分程度の隣町の学校でしたが、それでも公宅に住まなければならない状況でした。

当時の町の教育長さんは「自宅からの通いでいいんだよ」と言ってくださったのですが、やはり地域の方々からは「今までそのようなことはない」ということで、自宅通勤に理解を得ることはできませんでした。

当時、夫も近隣校の教頭をしていましたので、私は公宅に住みつつ自宅に戻り、夫や子どもの支度をして公宅に戻るような生活が続きましたが、両親、ご近所の方々の助けがあって、何とか乗り切ることができたと思っています。

居住地に関する支援はなかなか得られませんでしたが、そのような状況でも今までお世話になった教育長の皆さんには、少しでも女性の先生が働きやすいようにと人事等々いろいろと支援してくださいました。

あらためて今こうして働けているのは、たくさんの方々のおかげだと感謝の気持ちでいっぱいです。

3・管理職になって気づいたことは、どのようなことですか？

まずは健康第一。あらためてそう思いました。

お母さんがダウンすると、家庭全体がうまくいかなくなってしまいます。それと同じで、自分が（校長が）一番元気でないと学校運営を円滑に進めることが難しくなりますし、みんなを幸せにすることもできません。

実は3年前、病気でおよそ1か月半入院し、皆さんに迷惑をかけてしまいました。

校長が元気で明るいと、先生方も元気で笑顔になる。先生方のそのような姿を見た子どもたちも元気で笑顔になる。私はそう思っていますので、自分がダウンしないよう、しっかり健康管理をしなくてはならないと痛感しました。

もう一つは、教頭先生の働き方ですが、仕事ばかりに偏らないようにして、頑張って欲しいと思っています。

自分の家庭を犠牲にしてまで働くことが当たり前ではありません。教頭先生も一般の先生方と同様、家庭を第一に考える。そういう職場であるべきだと思っています。

4・管理職のやりがいや魅力を、お聞かせください。

私が一番嬉しい時は、自分の思いが全ての職員と共有でき、そして、その思いが子どもたちに響き出して、みんなの思いが一気に同じ方向に向いて、学校がガラッと変わる瞬間です。その「連鎖の瞬間」が大好きです。

自分の弱点でもありますが、私は、トップダウンが苦手な性格です。
もちろんトップダウンが必要な時はありますが、私はどちらかと言うと先生方と一緒になって動くことを選んでいます。
例えば、子どもが怪我をした時には、いち早く現場に駆けつける校長でいたいですし、先生方と共に歩くことで、何か伝わるものが必ずあると考えています。

学校のグランドデザインを例にお話しますと、グランドデザインは先生方と考えて作成していますが、先生方から「グランドデザインは大人用になっているので、それを子ども編に書き換えましょう」と一歩踏み込んだ提案があり取組を進めた結果、今では子どもたちも、私が先生方と一緒に取り組んできたキーワードを覚えていて、全校集会でも宿泊研修に行く時でも、みんなそれを意識して行動できる体制づくりができていると思います。これは本当に嬉しいことですね。
先生方が頑張っている姿を見ていると、私も何でも頑張れると思っています。

5・後輩教職員へのメッセージを、お聞かせください。

人との繋がりを、大切にして欲しいと思います。
私は学校に勤めて今年で31年になりますが、本当にいろんな方々に助けられて、今日に至っています。お世話になった人は、私が困った時や新たなことを進める時に、理解や応援をしてくださった方々ですが、一度繋がったご縁はその後もずっと続いていると感じています。

新型コロナウィルスの影響もあってのことだと思いますが、今の若い先生方は、自分一人の力で解決しようと頑張り、人に頼ることを遠慮しているように感じます。しかし、私は「人との関わりが、自分の将来を救ってくれる」という気がしてならないのです。「人との関わりは決して面倒なことではなく、ゆくゆくは全て自分に幸せを運んでくれる！力をいただくことができる！あなたの財産になる！」そのようなものではないかと思っています。

6・子育てを始める職員に対して、管理職として、どのようなことに気をつけていますか？

私も子育てで大変だったことを踏まえ、「休んでも大丈夫だよ。人に迷惑をかけることではなくて、あたり前のことなのだから、みんなで助け合わなくてどうする！」という話を職員にして、安心して休める環境づくりをしています。
「休めない職場」は、ゆくゆくみんなが無理をして業務に支障が出ることもあり得ますので、そうならないように心がけています。

また、教員同士で結婚をすると、忙しい時期が重なってしまいます。私もそれを経験していますので、例えば、共働きのお母さん先生が「もう！本当は私も仕事がしたいのに！」と家庭のことで怒っている時は、「まったく、そうだよね・・」と愚痴を吐き出してあげることを大事にして、できるだけ寄り添うようにしています。
このような時は、女同士の方がスッキリするので女性の管理職でよかったなと思います。男性の管理職の先生なら、きっと「そうだよね」とはならないでしょうね。（笑）

7・ご自身が子育てをしている時に、管理職から、どのようなサポートが支えになりましたか？

今でも忘れられないエピソードがあります。
私がまだ一般教員だった頃、お昼頃から猛吹雪になった日がありました。当時、そのような時は、集団下校を行っていました。
私もその対応に追われバタバタしていた時に、校長先生が私のところに来て「これから保育所に行って先生の二人の娘さんを迎えに行くけれど、俺のことは「爺ちゃん」と言っていいかい？」と言って、娘を迎えに行ってくださったのです。

学校から歩いて5分位のところにある保育所ですが、吹雪の中、二人の娘を学校に連れてきてくださいました。
20年たった今でも忘れられない嬉しいサポートでした。

8・インタビューの最後となりますが、お伝えしたいメッセージはありますか？

女性だから、男性だからではなく、仕事のやりにくさを経験した者たちが管理職となってあらゆる場面で発信することで、働き方を徐々に変えることができています。

「どうせ何も変わらない」「自分は、それどころじゃない」と思う前に、「自分だったら何ができるだろう」と、立ち止まって欲しいです。

完璧じゃない自分だからこそ誰かのために頑張れること、役に立てることがたくさんあると私は思っています。

［インタビュー実施月：令和4年3月］

インタビューにご協力をいただきまして、誠にありがとうございました。